

ります（インドなどでは、腰をまるめています）。

日本の身体文化の「独自性」がここにあるのです。ですから、私は日本文化を支えてきたのは仙骨だと考えてきました。

たとえば、喜劇役者などがよくやるように、着物で高い位置に帯を締めますと、子どもっぽい姿になります。

このように、子どもの時は高い位置で帯を締めますが、大人になっていくと、この帯の位置が下がってきて、成熟すると臍の下、丹田のところで帯を締めます。成長するとともに骨盤が発達して重心位置が下がってくるのです。

ところが最近、大人になっても浴衣の帯の位置が上のままというのが目立っているのです。西洋人が旅館に泊って浴衣を着ている姿に近いのです。

大人になっても帯の位置が上ということは、身体感覚上、「腰」がないのです。腰の感覚がないということは、実は充分大人になっていないということです。

野性というものが成長した時に、女は母性、男は父性として発現します。それは一言で言って骨盤の成長なのです。その中心にあるのが仙骨です。

仙骨は生殖器の中核であり、骨盤の発達がないと、女は

母性、男は父性が発現しないのです。仙骨の働きは「種族保存」に大きく関係しているのです。

種族保存は、人間社会においては下の面倒を見ること、あるいはボスとして責任を取ることです。現代、こういう能力が薄くなってしまったのは、野口整体の立場からすると、骨盤の力の問題で、仙骨が発達していないことから来ているわけです。

これは、戦後の生活の変化で、正坐をしなくなったことが大きな原因です。

4 日本と西洋の「身体」比較文化論

―「腰・肚」文化と「頭・肩」文化

日本と西洋の「身体文化」を比較してみますと、日本の伝統的な「腰・肚」文化に対して、西洋は「頭・肩」文化と名付けられるほどの相違があります。

例えば「鋸ノコギリ」です。日本の鋸は引いて切れるように出ていますが、西洋の鋸は押して切れるように出来ているのです。包丁にもこの違いが出ており、和包丁は引くことで切れるようになっていきます。

引いて力が出るのは、腰が中心の体です。押して力が出るのは肩が中心となっている体です。日本人は引くことで力が出、西洋人は押すことで力が出る体なのです。この体の違いが相撲とボクシングを生み出したのです。

また、西洋では、衣服は「肩」で着るもので、肩を要としています。上着にはネクタイをし、タキシードでは、胸の襟を広くし、また花を飾ります。そして、軍人は肩に肩章をつけますが、肩は権威を表すものです。このように、「胸・肩」という上体に体の中心があります。

日本の伝統的な「着物」は「腰」で着るものです。着物は背縫い（背中にある縫い目）を中心線として出来ています。この着物の中心線（背中心）が「背骨」と合うように動作できれば着崩れないのです。このような衣服が、「腰」そして「背骨」を育てていました。日本人の体の中心は背骨であり、上下の中心は腰なのです。

明治生まれの老人も少なくなりましたが、二、三十年前までは、大正や昭和の初めに生まれた人たちよりも、豊饒かしくしげ（註）としていました。それは、明治までは、仙骨を土台として、中枢神経系である脊髄を擁する背骨を、意識して養うという「型」＝「腰・肚」文化が堅持されていたから

です。和魂洋才と言われた「和魂」とはこのことでした。

（註）豊饒

年若いとも身心ともに「元気で丈夫な様。豊には「素早く反応する」の意があり、饒には「光輝く」「盛ん」という意がある。

このように、正坐と衣服により育てられた「腰と背骨」という「裏側」に価値を置くのが、日本の身体文化です。具体的には、特に女性の帯に関してですが、後ろの結び目が帯の正面であり、着物は後姿が一番美しく見えるようになっていきます。このことが、「裏側」に価値を置く文化であることを象徴しているのです。ですから女性は、値段の高い帯をここにするといいわけです。

この日本の「帯」は、身心に「緊まり」の感覚を与えるためのものですが、西洋では首に締め胸を飾る「ネクタイ」がこれに当たります。

欧米人が椅子とテーブルで、ナイフとフォークを持って食事をし、対話の時に椅子で足を組んだ姿が美しく見えるのは、「椅子坐」が彼等らしさと、その特性を活かす「型」として身に付いているからです。このように、生活文化も